

今週の為替相場見通し(2020年3月16日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		101.18 ~ 108.50	108.03	103.50 ~ 108.50
ユーロ	(ドル)		1.1055 ~ 1.1495	1.1117	1.1050 ~ 1.1350
(1ユーロ=)	(円)		116.18 ~ 120.30	119.90	116.50 ~ 120.00
英ポンド	(ドル)		1.2250 ~ 1.3200	1.2290	1.2000 ~ 1.2450
(1英ポンド=)	(円)	*	131.23 ~ 137.21	132.47	130.50 ~ 134.00
豪ドル	(ドル)		0.6122 ~ 0.6685	0.6188	0.6050 ~ 0.6300
(1豪ドル=)	(円)	*	64.38 ~ 69.18	66.68	63.50 ~ 68.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 大谷 未央

(1)今週の予想レンジ: 103.50 ~ 108.50 円

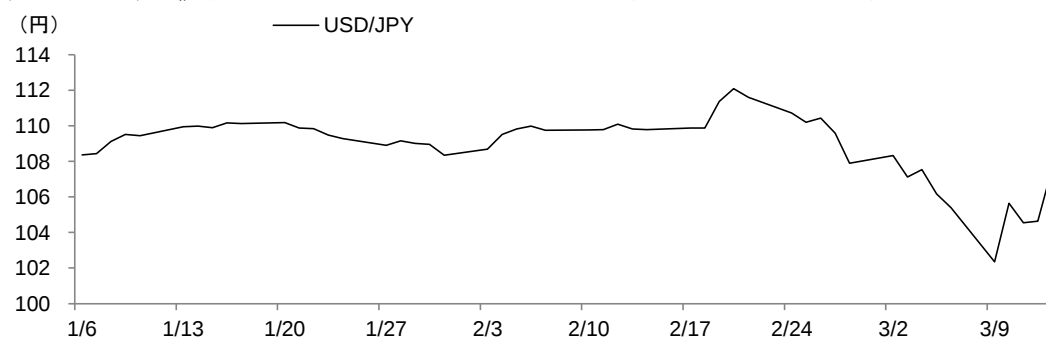
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は週初に急落する展開。週初9日に103.98円でオープンしたドル/円は、週末にOPECプラスにおいて追加減産合意に至らず、サウジアラビアが大幅増産を打ち出したことを背景とした原油価格の急落や、新型肺炎の感染拡大を受けたリスク回避姿勢の強まりから、ドル売りが加速した。世界的な株安と米10年債利回りが0.50%台を割り込む中、ドル/円は101円台まで下落し、その後主要米株指数が暴落に伴い取引停止となったことから、一時週安値である101.18円まで下落した。翌10日はトランプ米大統領が新型コロナウイルスで打撃を受けた産業への救済措置と給与減税を目指すとして述べたことが伝えられる中、105円台まで上昇。その後ムニューシン財務長官と民主党のペロシ下院議長が経済対策を巡り会談を行うとの報道も受け、106円付近まで上昇した。11日は英中銀が緊急利下げしたことにより欧州株が全面高となる一方、米国の経済対策への期待後退で104円台前半まで下落した。その後世界保健機関が新型コロナウイルスをパンデミックとしたことで104円台前半まで下落した。12日はトランプ大統領の演説で、欧州から米国への渡航禁止が発表されると、103円台前半まで下落した。その後ECB理事会での結果を受けてユーロドルが売られる展開にドル/円は106円台前半まで値を戻した。13日は、日銀が予定外の資金供給オペを行う等緩和姿勢を強化したことにより、日経平均株価が上昇したことや、トランプ米大統領が非常事態を正式に宣言し、500億ドルの連邦政府予算をもって検査や治療体制の拡充等取り組むことを発表したことから、一時週高値である108.50円をつけ、108円台前半で越えた。

今週のドル/円相場は上値の重い展開を予想する。先週はトランプ大統領が給与税減税など財政面での検討方針を明らかにするなど、各国政府・中銀が景気対策に乗り出し始めているが現状金融市場での混乱は抑えきれない。また、16日(月)早朝にFRBが1.00%の緊急利下げを行い、加えて債券保有を7000億ドル増やす方針を表明した。FRBは持てる手段をほぼすべて出し切っている印象だが、今朝時点でダウ先物は下落で始まっており、これでマーケットが落ち着くかは依然として不透明である。一方で、今週は18(水)~19日(木)に日銀金融政策決定会合が予定されているが、日銀は政策金利の引き下げ余地が乏しいとみられる中、ドル円の上値は重くなるだろう。重要指標の発表は16日(月)に米3月NY連銀製造業景況指数、17日(火)に米2月小売売上高、18日(水)に米2月住宅着工件数、20日(金)に米2月中古住宅販売件数の発表が予定されている。

(3)先週末までの相場の推移

先週(3/9~3/13)の値動き: 安値 101.18 円 高値 108.50 円 終値 108.03 円



2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 玉井 美季子

(1) 今週の予想レンジ: 1.1050 ~ 1.1350 116.50 ~ 120.00 円

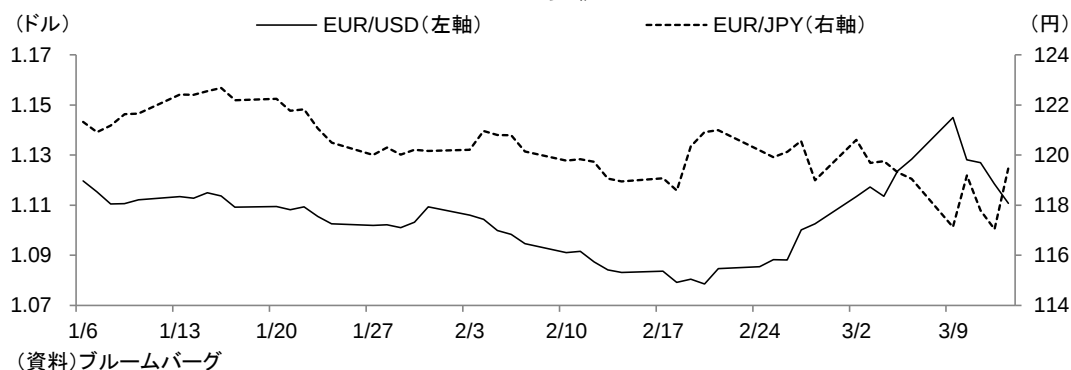
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は週後半に安値をつける展開。週初9日に1.14台前半でオープンしたユーロ/ドルは米金利が過去最低水準で推移したことに加え、米株の取引停止も影響し、一時週高値の1.1495まで上昇したが、欧州でも新型コロナウイルスの感染拡大が懸念され、上値の重い推移。10日は米政府の救済措置に対する期待感からドルが買い戻され、1.12台後半までじり安の展開となった。11日は、後半にかけてドルが買われる展開に1.12台半ばまで下落した。12日は、ECB政策理事会にて量的緩和政策の拡大が決定されると1.13台まで値を戻したが、内容に対する失望や、13日夜から、欧州から米国の入国禁止が開始されることを控え、1.10台まで下落した。13日は終日ドル買いが優勢となる中、軟調に推移。一時週安値となる1.1055まで下落し1.11台前半で越週した。ユーロ/円は週初9日、原油価格の急落や週末にコロナウイルス感染拡大懸念が広がったことで118円台の半ばにギャップダウンしてオープン。ドル/円の急落を受け週安値となる116.18円をつけたが、翌10日は前日の急落の巻き戻しの動きを受け119円台半ばまで上昇する荒っぽい展開。その後は再びリスクオフムードが広がる中、11日・12日と軟調に推移し12日には再び116円台前半まで下落。しかしECBで量的緩和政策の拡大等が決定されたことや、ドル/円の上昇を受けて上昇に転じ、13日には週高値となる120.30円まで上昇。結局119円台後半で越週した。

今週のユーロは底堅い展開を予想。先日FRBは50bpの緊急利下げを行ったが、今朝方さらに100bpの緊急利下げを行った。これでFF金利の誘導目標は0-0.25%となり、最大雇用と物価安定性の目標達成に順調に向っていると確信が持てるまでゼロ金利を維持すると表明した。またバランスシートの拡大も表明した。一方、ECBは先日の政策理事会でQEを拡大したものの利下げを行わなかった。今後協調利下げ等の期待も高まりそうではあるが、ECBは追加利下げには消極的であり、ドル安が進行しそうだ。またECB政策理事会後の会見においてラガルド総裁は協調的な財政対応が必要であると述べており、独メルケル首相も財政出動の可能性を示唆する発言をしたことから、今後ユーロ圏での財政対応への期待が高まりそうである。これもユーロにとっては追い風となろう。一方で、新型コロナウイルスの感染拡大はイタリアのみでなくドイツやフランス・スペイン等各国で確認されている。イタリア・スペインでは既に全土で移動制限がかかっているが、今後他の国でも移動制限が出てくるような事態になる場合には、ユーロ圏の経済への不透明感が強まりそう。米国が欧州からの渡航を30日間停止したことも不透明感を高めている。対円ではリスクオフムードは変わらない中、下値は限定的になるものの、上値の重い展開を予想する。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(3/9~3/13)の値動き: (対ドル) 安値 1.1055 高値 1.1495 終値 1.1117
(対円) 安値 116.18 高値 120.30 終値 119.90



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.2000 ~ 1.2450 130.50 ~ 134.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、下落。週明け9日の金融市場は、原油暴落で始まった。前週末を45ドル/バレル水準で引けた原油は、一気に30ドル台前半まで暴落（ブレント）、原油暴落と並行して株価は世界的に急落した。この局面のドル全面安先行は、株安とリスク回避の文脈に乗る円高が牽引した感が強く、対円では大きく水準を切り下げたポンドも、対ドルでは小幅上昇が先行した。しかし、週後半に掛けては、株安が一段と加速する中、一転、円安とドル高が支配的になった。11日には欧州勢の参入と同時に英中銀は緊急利下げを発表。基準金利の50bp引き下げ（引き下げ後0.25%）の他、中小企業融資を促進するための銀行向け融資、流動性増強のための反景気循環資本積み要件の緩和などを発表した。利下げ発表直後こそ小幅下押ししたポンドは、一連の包括的な金融緩和策を好感してか程なく反発。更に、同日発表された英予算は、向こう5年間で1750億ポンドの巨額財政出動に加え、新型コロナウイルス対策として300億ポンドの緊急予算配分という空前の大盤振る舞いとなった。しかし、一連の英当局対応に対するポンドの反応は冷淡で、翌12日から週引けに掛けては、上述の通り、株価急落と並行したドル全面高と円安が圧倒的な勢いで主要通貨市場を席卷した。株価全面急落の要因は、トランプ米大統領の演説（11日）や欧州中銀理事会後のラガルド総裁記者会見（12日）などに求められた。前者は欧米による協調の可能性を著しく毀損した点やコロナ対策に関する大統領自身の認識が不鮮明だったこと、後者は「なにがなんでも」といった意気込みが示されなかった点などが失望された。

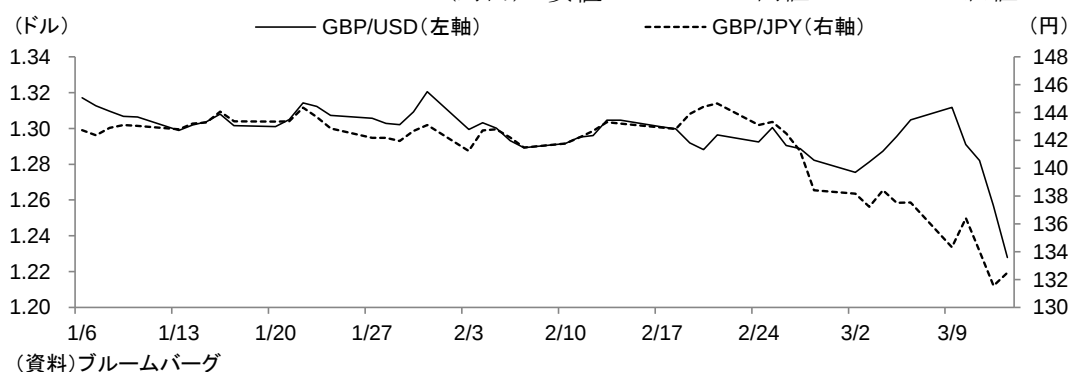
今週の英ポンド相場は、対ドルでもう一段の下落を、対円では軟調気味の横這いを予想。予想の前提として、まず、先週の相場に関する市場の認識が共有されるまでに、今しばらく時間が掛かる可能性を挙げる。更に、通常であればそうした認識の交錯は方向感の交錯につながるはずだが、敢えてポンド続落を中心にみるのは、先週後半に掛けてのポンド急落に、理屈を超えた、強制的なポンド売り需要の存在を感じるから。先週の相場の理不尽は、まず、週初、株安=円高/ドル安で始まったはずの主要通貨市場が、週後半に掛けて株安=円安/ドル高に180度転換してしまったこと。かねて、「リスク回避の円高」という条件反射が定着し続けることに違和感はあったものの、少なくとも一定の真実はあったはず。一方で、「円にしても使い途（投資先）がない」などといった議論にも一定の説得力は見出せるものの、目の前の相場が円安に振れたからと言って、安易に飛びつくことも躊躇われる。また、新型コロナウイルスが中国を始めとして景気減速と資源需要減を警戒させたことで、株安と原油安が並行した経緯には納得がいくものの、9日以降の原油続落はサウジとロシアの「価格競争」という供給側の要因によるもので、それが株安を伴った経緯にも違和感が拭えない。強いて言うなら、産油国を除けば、原油安はむしろ景気押し上げ要因だったはずではないか。最後に、ラガルド総裁の発言は、市場の「期待」に応えられなかったのかも知れないが、市場の「催促」に応えるべきは、本来、財政政策だったはず。「それが相場というものだ」と言ってしまうは是非もないが、であるならば、金融政策と財政政策が見事な協調を取った英当局の対応が、ほとんど材料視されなかった事実をどう理解したらいいのか全くわからない。ひとつだけ否めないのは、ドルを買う需要、ポンドを売る需要、円を売る需要が市場に強烈に存在していたという事実。先週の値動きを経て、そうした需要が概ね解消されたと考えるよりは、あまりの困惑故に、未だ消化不良と見込むべきと考える。

(3) 先週末までの相場の推移

先週（3/9～3/13）の値動き:

(対ドル) 安値 1.2250 高値 1.3200 終値 1.2290

(対円) 安値 131.23 高値 137.21 終値 132.47



4. 豪ドル

金融市場部 グローバルFIチーム 大庭 泰典

(1) 今週の予想レンジ: 0.6050 ~ 0.6300 63.50 ~ 68.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は一時0.61台前半まで急落し、0.6188を回復して越週。世界各国で新型コロナウイルスの感染拡大が報じられた他、OPECプラスの会合で協調減産合意に至らず、サウジアラビアが大幅増産を打ち出したことで原油相場が暴落したことを背景に、東京時間に0.6312迄急落後、再び0.66台を回復する等荒い値動きとなった。翌10日も上値の重い展開。ロバートソンNZ財務相が同国中銀に対して利下げを求めたことも売り材料となり、0.6463迄下落。週中には米株式市場に財政出動等の政策期待に豪ドルも下げ止まる場面も見られた。しかしトランプ米大統領が開催を明言していた大型景気刺激策に関する記者会見に姿を見せず、具体的な経済対策も示されなかったことで、再び失望感からじりじりと売り優勢に。一方で翌週の日銀の金融政策決定会合で新興国のETFを購入を発表予定との報道が伝わると一時0.6540迄上昇。翌12日、豪政府から176億豪ドルの景気刺激策を発表したが反応は限定的だった。東京時間に開かれたトランプ米大統領の演説で欧州から米国への渡航停止が発表されると、世界経済悪化への懸念及び海運・空運の燃料需要の低下見通しから原油相場が再び下落すると、豪ドルも下げ足を早めた。その後ECBが政策金利据え置きを発表するとユーロが下落。米株式市場で今週2回目のサーキットブレーカーが発動されると中、豪ドルは一時0.62台前半迄急落。週末13日は一時0.6122まで下落するも、トランプ米大統領から国家非常事態宣言に加え、石油大規模購入で戦略備蓄の拡大に取り組むことが発表されると原油相場の上昇と共に豪ドルも買い戻され0.6188で越週した。

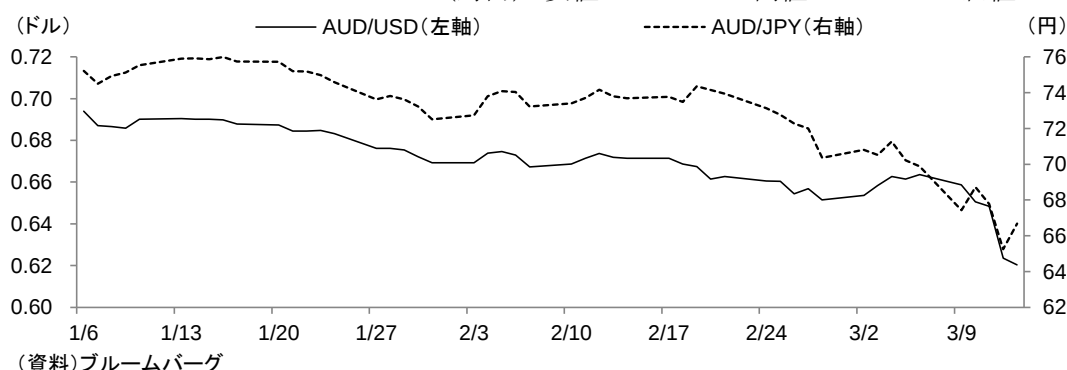
今週の豪ドル相場は引き続き荒い値動きが予想されるも、先週末のトランプ米大統領の国家緊急事態宣言により下げ幅を縮小した株式市場と原油市場を背景に、買い戻しが優勢となるであろう。先週の値動きは新型肺炎の感染拡大と原油相場の暴落を切欠とした金融市場の混乱が背景だ。抗ウイルス薬の開発には至らず未だ感染拡大を抑え込むには至っていないが、一旦原油相場の回復が資源国通貨のサポート材料となろう。今週はNZ中銀が緊急利下げを実施した等、各国の中央銀行の動きに注目。尚、今週は16日(月)中2月小売売上高、中2月鉱工業生産、中2月固定資産投資、17日(火)豪第4四半期住宅価格指数、RBA議事録、19日(木)豪2月雇用統計が予定されている。また週中には日米各国の金融政策決定会合が予定されており、新型コロナウイルスによる金融市場の混乱への対応策に注目が集まる。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(3/9~3/13)の値動き:

(対ドル) 安値 0.6122 高値 0.6685 終値 0.6188

(対円) 安値 64.38 高値 69.18 終値 66.68



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。